森の名手・名人シリーズ27

名人 渡辺 貞男（75）
岐阜県大野郡白川村

聞き手 平 尚起
石川県立金沢伏見高等学校一年
平成20年取材

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県においては、現在、41名の「森の名手・名人」がいます。
この「森の名手・名人」を「森の"聞き書き甲子園"」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

ヒデ細工 消え逝く伝統……

1. 名人の生まれ育った白川村荻町（白川郷）

名人が暮らす白川村荻町にある合掌造り集落は、1995年（平成7年）にユネスコの世界遺産に登録され、今では毎年日本全国・世界各国から多くの人が訪れる観光地となっています。

江戸時代、深い雪に覆われる白川郷では、現金収入として養蚕業が盛んになりました。また、ヒエやヨモギを敷き蚕糞を混ぜた土に人尿を撒いて数年かけて作った煙硝土から、火薬の原料である煙硝を生産していました。これらは白川郷の大きな産業でした。

しかし、煙硝生産の規制や第二次世界大戦後の養蚕業の衰退、ダム建設などで、住民が都市部に流出し、合掌造りの家屋が激減しました。そこで昭和49年頃から地域住民による保存活動がはじまったのです。民家とともに田畑や山林など景観、伝統も保存していこうとしているのです。

ヒデ細工は、このような白川郷で生活する人たちによって、長く厳しい冬期の作業としてどの家庭でも当たり前のように受け継がれてきたのです。ところが時代の変化とともにその技術が受け継がれることがなくなり、生活の中から次第に消えていこうとしています。

2. ヒデとは

木材を幅およそ1㎝、薄さおよそ1㎜に裂いてテープ状にしたものをヒデというんじゃ。これを水で湿らせて、柔らかくしながら編んだカゴなんかをヒデ細工とゆうとるんや。

貞男さんが編んだヒデ細工

カゴに何を入れとったかじゃと!?そりゃあ、なんでもじゃ。田んぼするには「へんこ（腰カゴ）」が必要やろ。田植えするときに、苗を入れるやつじゃ。山に入るときは、それに山菜やらきのこやら木の実やらを入れるんや。米や麦や粟を洗うときには、浅く編んだザルを使ったよ。米なんかを入れておく（保存しておく）「しょうけ」には深いのを使ったよ。

ヒデは目の粗さやカゴの深さや大きさは自由自在に変えて編めるんじゃ。やからどんなもんでも入れれるんや。「へんこ」の目は粗くして編んどるよ。水がもれるようにせんといかんからな。逆に「しょうけ」は中身が出ちゃ困るから、目は細かく編まんといかんな。

牛の草（エサ）を入れるのには、幅50㎝程の大きいのを使ったし、梅干を干すにはザルやな。2月の初午（はつうま）に供えるだんごを茹で上げるときにもヒデのザルを使うんじゃ。昔はなぁ…毎日の生活のいたるところで使う、欠かせないものやった。

3. ヒデをつくる

今使っとる木材は、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ウワミズザクラ、ヒノキ、エンジュなんかじゃな。これらは柔らかくて、弾力もあるから、薄くして曲げても折れん。だから編むのに向いとるんじゃ。他の木材は使えんなぁ。編もうとすると、裂けてしまったり、折れたりしてしまうんじゃ。

雪が降る前に山から木材を切ってきて、それを1本1本薄く裂くんじゃ。両刃のなたのようなもので切れ目を入れて、そこからいっきに裂くんじゃが、これが難しくてな。今じゃこれをできるのは、わしだけかもしれんな。編むことも器用でないとできんが、ヒデをつくるのに木材を裂く作業は、もっと器用じゃないとできんな。ヒデ細工をするもんが減ってきた原因のひとつなのかもしれんな。

じゃがな、13年程前、わしは木材をうまく薄く裂く加工機械を自分で作ったんじゃ。これで難しい作業も簡単にできるようになったし、手作業では裂くのが難しくてカエデくらいしか使えなかったけど、おかげで他の木材も使えるようになったんじゃ。すぐ折れてしまう木材はだめじゃがね。

ヒデは、つくったばかりのも編めるが、乾燥させておけば何年でも保存できるんや。編むときに水につければ柔らかくなるからね。

4. 丈夫なヒデ細工

ヒデ細工はヒデ以外何もいらん。色もつけとらんし、接着剤も何も使わん。底から丁寧に編んでいったカゴは丈夫で何十年も使えるんじゃ。わしはヒデを編み出して60年程になるが、若いころ編んだカゴもまだまだ使ってもらえとるはずじゃ。合掌造りの中に置かれとるヒデ細工は、わしよりもっと昔の人が編んだもんじゃ。ヒデ細工は丈夫やからな。

機械は便利じゃが、やっぱり手作業にはかなわんね。機械を使わずにつくったわしの「へんこ」は椅子にして座っても大丈夫じゃ。何十年と使えるよ。丈夫なヒデ細工を編むには、木材を裂くときの厚みや木の繊維（木の目）も大事なんじゃ。微妙な厚みと繊維をみるには、機械じゃなくて手じゃないとできんからな。

5. 貞男さんとヒデ細工

この仕事を始めたのは6年生頃に父親がヒデ細工を編んでいるのを見て面白そうだと興味を持って編んでみたのがきっかけで、それからずっと編み続けているんや。昔から器用でな…最初は自分が好きで趣味として編んでいたんじゃ。でも、父親にも勉強よりもこっちの方に進めと勧められたから仕事として編むようになったんじゃ。

今では公民館とか学校で講習をやってるけど、今の若い人はこういうの編まんでな…。年寄りはよう集まっては編んだんじゃ。講習会では早う覚える人となかなか覚えられん人といたよ…。他にも体験もできて、たまたまヒデ細工を見て興味を持って調べてくれて、県外とか、遠くからわざわざ習いに来てくれる人もいる。

そこで教えとる編み方は2通りだけなんや。でも、基本のその2つがちゃんと編めるようになれば、自分で好きなように編めるんや。自分で考えて新しい物を作るってのはすごいことだと思うよ。そういうところもヒデ細工の良さなんじゃないかなぁ……。

ヒデ細工はお年寄りからの受けがいいから、老人ホームで教えてくれないかって頼まれたこともあったよ。時代が変わっていくのは仕方のないことだけど、変わらないものもあるってのはいいもんだね……。

ヒデ細工をやるのは冬だけで、雪が本格的になる前に材料を採ってきて、それを息子がいい具合に機械で調節してくれるから助かってるよ…。大きさがそれぞれ違うから編める数も時間もばらばらだね。

6. 伝統…。

詳しいことはわからんけど、昔はな…この辺じゃ誰でもヒデ細工をやってたんじゃ。でもな、外国製の商品が入ってきて、そっちは洗えたり、安かったりして手頃やったんやろうな…あんま売れんようなったんや。そのせいかは分からんけど、編む人が居らんなってな…。それに、昔は機械がないから、全部手でやるとなると大変でな。それが出来るのは、もうわしくらいじゃねぇかなぁ…。

今でも、趣味とかで編んでくれる人はいるけど、これを本業にしたいっていう人はなかなか居らんから、こういう古いものは続かないのかもねぇ…。でも、息子もわしに似て器用でな、本当は高校に行かんとすぐに継いでほしかったんやけどなぁ…。今じゃ自分の仕事の岩魚の養殖をしながら手伝ってくれとるから安心だよ。それに跡も継いでくれることが決まった時は嬉しかったね。

7. どんな人が買う?

買っていくのはほとんどが観光客で、もの好きは結構大きいのを買ってくれるよ。他にも民宿とかから注文とか受けて、それを編んだり気まぐれに編むね。民宿は客が着る浴衣とかを入れるのとか、ただ単にあげたりするものを注文してくるよ。たまに病院に行かないとならんくて、そのときにもペン立てや花立ても頼まれたりするよ。

昔は生活には欠かせないものだったから、実用品として買ってくれてたんだけど、今はちょっと違ってきてるのかなぁ…。買ってくれる人は「自然のものがいい」とか「部屋のにおいと悪い空気を吸い取ってくれそう」って言ってくれてるし私もそう思う。でも、やっぱり使えるものなんだから使ってほしいねぇ…。

ヒデ細工を編む貞男さん

名人 渡辺（わたなべ） 貞男（さだお）さんのプロフィール
- 生年月日：昭和8年4月22日生まれ
- 職　業：ヒデ細工
- 経験年数：60年

白川村に自生する植物（木本・草本）や野生きのこ栽培研究を続け、その実績を買われ地元白川村から公共で利用する樹木や山野草の生産の委託を受け、数十年にわたり手掛けてきた。

更に、白川村唯一の製材所の運営を任され、村で利用される木材の製材に尽力してきた。

製材などで木材を扱う中で、子供のころから見よう見まねで実施してきたヒデ細工に取り組み、村内の山林で伐採された広葉樹不用木を有効利用してきた。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
公益社団法人
岐阜県緑化推進委員会　佐藤正吉】